

学習者間評価を用いた英語グループプレゼンテーション指導

Making Use of Peer Evaluation: A case of an EFL course with a focus on group presentations

山口 高領
早稲田大学

Abstract

This paper describes a university-level EFL (English as a foreign language) course that I taught in the fall semester of the 2014 academic year, in which learners of English were required to make a group oral presentation in English four times, or about once every three weeks, during the semester. The paper also reports on the learners' course evaluation from a questionnaire conducted at the end of the semester. In order to prepare for a presentation, the learners were told to read one part of the textbook assigned in the class. They presented their assignment to the whole class in a computer-wired classroom, using slides which had images but no words appearing in them. They were also asked to try not to look at their prepared manuscript when presenting their assignment. After each presentation, they were required to enter comments in the space provided on the LMS (Learning Management System) in the university network. Specifically, they were encouraged to give positive comments on each other's presentation and suggest ideas for making it better. The learners were advised to utilize each other's comments as they prepared their next presentations. Based on some results of a questionnaire conducted in the penultimate lesson, it was found that 75 % of the learners supported this type of teaching and learning. Three aspects of the method were discovered which were particularly supported by the learners: learners (a) made group presentations, (b) were told to try not look at the prepared notes, and (c) made their presentations and comments in an interactive fashion.

キーワード: グループプレゼンテーション, 学習者間評価, 協働学習, 授業毎の振り返り,
LMS (Learning Management System)

科目名	英語（必修科目）
対象者とクラス人数	大学1年生 2クラスで48名
学習の目標	グループでのプレゼンテーションが英語でできること

1. はじめに

筆者が、本稿で報告する英語の授業を行う前に考えたのは、以下の点である。

- ・個人学習や少人数学習とは違い、20 から 30 人程度の教室で行う英語授業だからこそ、行えることはないか
- ・すると、それは、協働学習する力も涵養することではないか
- ・また、プレゼンテーション（プレゼン）力は、大学生が必要としている力であろう
- ・しかも、単に伝えるだけでなく、教えることも最終目標に含めることが、学習内容を深く学ぶことや、発表する・教えるという技術の習得にも効果的ではないか
- ・学部の基礎教養としての英語授業という位置づけであるからこそ、扱う内容は学部の基礎教養に関連したものにはできないか
- ・大学の提供する ICT を使用することで、省力化と効果的な教育効果を発揮できないか

上記を踏まえ、本稿で述べる英語授業では、グループで英語プレゼンができることとは、具体的に以下の要件を満たすことである、との前提に立った。

- ・原稿をなるべく見ずに、視線を聴衆に向ける
- ・聴衆とのやりとりを行う
- ・伝えるだけでなく、聴衆に考えさせ、内容を学ばせるようなプレゼンを行う
- ・基礎教養的な内容を扱った、難易度の高すぎない英語の文章の載っているテキストを使用する

本稿は、今回の授業の試みを伝えることを目的とする。この目的のために、筆者が行った授業内容を述べ、学習者に対して行ったアンケート結果を報告する。

2. 授業内容

学習者や学習環境について述べた後、全授業の概要と各回の授業進行について述べる。

2.1 学習者や学習環境

本稿で述べる授業は、2014年度秋期セメスターにて実施され、週1回の頻度で、1回あたり90分の授業を全部で15回行う、という授業であった。授業は、2クラスに対して行われた。どちらもPC教室で行われた。1クラスには、当初から教室内設置プロジェクトがあった。もう1つのクラスには、当初それがなく、代わりに学習者と学習者のそれぞれのPCモニタの間に中間モニタがあった。前に出て行われているプレゼンテーションをしている様子を、発表者でない学習者が見ることが学習上欠かせないと考え、セメスターの途中からプロジェクトのある教室に変更して授業を行った。

授業実施大学は、入学時に英語力についてのテストを行っており、担当したクラスは、履修者の英語力がおおよそ同じとなるように編成されている。しかも、今回の学習者は大学1年生であり、彼らは、学期が始まった6ヶ月前の英語力についておおよそ同じだと考えられる。

2014年度秋期セメスター時に、他に履修した英語授業として、学習者は、週2回90分全10回の会話授業を受講していた。この授業は、学習者4人とファシリテーターで行われる形式である。

使用教科書として、池上・Mintzer (2011) による『やさしく読めるお金と経済の話 (All about Money and the Economy)』を使用した。この教科書は、22セクションから成り立っており、1セクションが終わった後に内容理解についての質問が付いている。1セクションあたり平均で約290語の長さである。リーダビリティには、日本人学習者向けリーダビリティ適応学年指標 MGJP (Mint Grade Level for Japanese Students) を用いて、この教科書を測定した。MGJP の設計思想などは、田淵 (2014) や田淵・湯舟 (2014) に詳しい。測定の結果、1セクションあたりの平均は約12.7であった。MGJP の示す12は高校3年生レベル、13は大学1年生レベルの難易度を示す。2013年度の英検2級・準2級とほぼ同難易度であった。なお、音声データは出版社のwebページからダウンロードできる。

2.2 実際の授業の進行と伝達事項

実際に行った授業の進行の概要を表1に示す。

第1回の授業では、筆者がガイダンスを行った。まず、履修者を、授業回数・教科書の構成・プレゼンの分担の公平性を加味し、6つの班 (A・B・C・D・E・F) に分けた。1つの班には4、5名が割り当てられた。班分けの後に、どのようなプレゼンを学習者に求めているかを、以下のように説明した。

- ・必要な準備として、割り当てられた教科書の1セクションを読み込んでおくこと
- ・次の準備として、発表者によって発表量が大きく異なることのないように事前に話し合うこと

- ・プレゼンを聞く側は、教科書を見ないこと
- ・プレゼンに慣れていない人もいるため、プレゼンの評価は第4回目のプレゼンに対して行うこと
- ・そのため、個人での準備や班での準備、また、実際のプレゼンは、出来ぐあいよりも、次への課題を見つけ、成長するきっかけになることの方が大事であるということ
- ・ Semester最後の定期試験においては、履修者は、英語の問に対して、英語の記述形式にて教科書記載の経済用語や現象の説明をすることが求められるため、自分がプレゼンすることや、他の班のプレゼンを聞くこと、自主的にテキストを予習・復習することは彼らの定期試験対策になること

表1 実際の授業の進行

	授業内容（発表内容）	担当班
第1回授業	教員からのガイダンス	-
第2回授業	英語プレゼン（1-1貨幣の機能・1-2利息）	A・B
第3回授業	英語プレゼン（1-3利息の行方・1-4保険会社）	C・D
第4回授業	英語プレゼン（2-1需要と供給・2-2二国間貿易）	E・F
第5回授業	英語プレゼン（2-3為替レート1・2-4為替レート2）	A・B
第6回授業	英語プレゼン（3-1株式会社・3-2会社と株主）	C・D
第7回授業	英語プレゼン（3-3証券会社・3-4電子取引）	E・F
第8回授業	英語プレゼン（3-5株主以外の人々・4-1景気の循環）	A・B
第9回授業	英語プレゼン（4-2景気刺激策・4-3景気のよい時）	C・D
第10回授業	英語プレゼン（4-4バブル・5-1資本主義と社会主義）	E・F
第11回授業	英語プレゼン（5-2社会主義, 5-3グローバル化, 5-4新自由主義, 5-5環境保護と経済・1-1から1-4）	A・B
第12回授業	英語プレゼン（2-1から2-4・3-1から3-5）	C・D
第13回授業	英語プレゼン（4-1から4-4・5-1から5-5）	E・F
第14回授業	英問英答記述問題の作成	-
第15回授業	定期試験	-

第2回から第4回までの授業で、すべての班が1回目のプレゼンを終えた。この段階で特に強調したことは、次のとおりである。

- ・プレゼンを実際に行ったことで各自の改善点が見つかったのではないか

学習者間評価を用いた英語グループプレゼンテーション指導

- ・また、自らのプレゼンを改善させるために、他の学習者が書いてくれた自分のプレゼンに対するよかった点と改善案を参考にするとよい
- ・発表前に班で実際に集まるとプレゼンの質が高くなるのではないか
- ・笑顔でプレゼンをするとうい
- ・簡単な表現、短い表現を心がけると伝わりやすい
- ・発表時にスライドは必要だが、文字は入れないこと（文字を入れたスライドを用いて口頭発表をすると、聴衆は、発表者の口頭発表力が足りなくても、内容が理解できてしまう）
- ・発表時に原稿にばかり視線を向けるよりも、聴衆に目を合わせた方が、自分を自信のある発表者に見せることができるのではないか
- ・声を大きく出せると、伝わるし、自信があるように見えるのではないか

第5回から第7回までの授業で、すべての班が2回目のプレゼンを終えた。この段階で特に強調したことは、次のとおりである。

- ・2回目のプレゼンは1回目よりも改善しており、充実感があるのではないか
- ・音声は無料でダウンロードできるのだから、発表者は事前に聞いて、練習をするべき
- ・教科書の内容を口頭説明するために、理解しやすいやさしい英語表現を用いることは必要だが、教科書の表現を学ぶことも必要なので、少し難しいと思われる表現は、述べた後にやさしい英語表現で言い換えるように
- ・スライドに聴衆の視線を向けるための指示を、適切な間を置きながら、明確に出すとよい
- ・本文の解説の後に質問を出す際には、解答の根拠も説明すると、プレゼンが「伝える」だけでなく、「教える」ものとなるのではないか

第8回から第10回までの授業で、すべての班が2回目のプレゼンを終えた。この段階で特に強調したことは、次のとおりである。

- ・スライドの画像を一言説明するだけで、喋る内容との関連がよくわかるのではないか
- ・用語の定義をはっきりさせてから説明すると、よりわかりやすくなるのではないか
- ・理解を確認するためにも、聴衆とともに盛り上がるためにも、質問セクションに、簡単な問いはあってよい。しかし同時に、理解を深めるような質問と解説も含めること

第11回から第13回までの授業で、すべての学習者が最後のプレゼンを行った。この4回目のプレゼンでは、1発表あたりの発表セクション数は4から5であり、A班のプレゼン以外では、これまでにプレゼンが行われた内容をもう1度確認することになった。また、この最後のプレゼンによって成績評価が大きく決まることを事前に伝えていた。

第 14 回授業にて、英語の文で表現することを求める英語の問題を作らせた。例えば、**Give one example about the principle of supply and demand.**という問に対して、英語の文で答えさせる形式である。このような形式の問題は、第 15 回授業にて行う定期試験の形式の確認を意図したものであった。また、この回では、後述する無記名アンケートを実施した。

2.3 1回あたりの授業の進行

1回あたり90分の授業は、およそ次のように展開させた。カッコ内の数字はおよその時間（単位分）である。

- ①プレゼン（10 ～ 30）→チャットでのよい点の共有（3）→教員からのコメント（10）
- ②プレゼン（10 ～ 30）→チャットでのよい点の共有（3）→教員からのコメント（10）
- ③プレゼンテーションに関連する教員からの話（残りの時間）

授業実施教室は、学習者が1人で1台のPCを使える環境にある。発表前に、PCを起動し、文書を作成できるソフトウェアを起動し、メモがとれる状態にするよう指示をした。また、実施大学の提供するLMS（Learning Management System）の機能の1つにテキストチャット機能（チャット機能）があり、これも発表前に起動しておくよう指示した。これらのソフトウェアを起動するよう指示した理由は、班のメンバーにコメントを共有させるためである。メンバーたちは、発表メンバーのそれぞれに対して、プレゼンのよい点と改善案をメモして送り、最終的には、すべてのコメントをクラス内で共有した。文書作成ソフトウェアはこのために必要であった。また、チャット機能については、よい点のみを教室全体でリアルタイムに共有するために利用した。

プレゼンのよい点と改善案をメモするよう指示した理由は、後に学習者にメモがフィードバックされて、学習者が振り返る材料になることを想定したためである。教員からのフィードバックを学習者は参考にすると考えられるが、同じクラスの学習者からの視点も学習者にとって有益であろうと考えたためである。プレゼンコメントを班単位にしなかったのは、個人を対象としたコメントでないと、振り返る学習者が、どのような点がよかったのか、改善するべきなのかを具体的に考えることができないだろうと考えたからである。単に悪い点だけを指摘するコメントではなく、「改善案」までも含めるコメントとした理由は、各学習者がコメント対象のクラスメートの状況をよりの確に把握して、相手の立場に立ったコメントをすることが、協働的な学習に必要であろうと考えたためである。

プレゼンを聞きながらコメントをすることは認知的に負荷の大きい作業であるので、そ

のような作業をするとき、学習者は、発表内容に集中しにくかったり、十分なコメントが出来なかったりするといった問題を抱える可能性がある。しかし、今回の学習者に関しては、それほど心配は必要なかった。というのも、コメントは日本語でも英語でもよいと指示したところ、ほとんどの学習者が日本語でコメントしており、1クラスの29名がコメントした第2回の授業では、平均で559語のコメントをしていたからである。ただし、キーボード入力の苦手な学習者や、メモをとる習慣のない学習者に対しては、プレゼンを聞いている間には、コメントを作成することよりも、キーワード程度を記すだけに留めるよう指示するほうがよいと思われる。

プレゼンの間、筆者は聴衆の一人として反応した。例えば、発表者が問いかける質問には手を上げたり、学習者に当てられた時には返答をしたりした。学習者から得られたコメントを踏まえ、教師が聴衆の一人として反応することは比較的よいことと学習者に捉えられていたようである。

プレゼンの最後には、各セクションに付随している質問を聴衆に考えさせ、答えの根拠も伝えるように指導した。プレゼンの回数が増えるにつれて、オリジナルな質問を作成する班も見られた。

プレゼンが終わった後には、プロジェクトをチャット画面に切り替え、学習者に、対象者の実名を伏せずに彼らのよい点のみを入力させた。この際、入力者を匿名にするのではなく、入力者の実名がわかるように設定した。こうした試みを実施した理由は、プレゼン直後により点だけが指摘されることによって、発表者の満足感を高めるのではないかと考えたためである。学習者全員が積極的にコメントを入力したわけではないように感じられたが、後述するように、この試みは、筆者の想像以上に肯定的に捉えられていたようである。

1回の授業あたり、2回のプレゼンが行われ、筆者からのフィードバックが行われ、授業終了間際には、レビューシートへの書き込みが行われた。この書き込み内容には、その授業で行われた2つの班の全員に対するよい点と改善案のコメントが含まれている。授業後24時間以内をめどに筆者がコメントを確認してから、LMSを使用して、該当クラスの学習者すべてがコメントを閲覧できるようにした。

教員を介さずにコメントを共有するのではなく、一度教員がすべてのコメントを確認してから、全学習者にフィードバックできるようLMSを設定した理由は、きつすぎると思われるコメントがあれば、コメント対象の学習者が目にする前に、やわらかい表現に書き換えをするなどの処置が必要であろうと考えたためである。幸い、今回の学習者のコメントには、ほとんどそのようなコメントはなかった。

Semester中に学習者から持ちかけられた相談の中から、ここで2点述べたい。1点目は、人によってコメントが違うので混乱することがあるが、どうしたらよいかという相談であ

る。この相談を持ちかけてきた学習者に対しては、まず、人によって見方が異なるので、矛盾するようなコメントを得られることは現実にあることを伝え、次に、この学習者個人のプレゼンの様子から筆者から見たよい点・改善点を伝えることにした。

もう1点は、改善方向はわかるが、なかなかうまく改善できないという相談である。このような相談に対しては、改善点は比較的早期に克服できるものと、時間がかかるものがあるのではないかと、また、克服すべき課題ばかり考え続けるのは、気持ちが滅入ってしまうので、自分の成長したプレゼン技術や英語表現力の向上に目を向けることも重要ではないかと返答した。

3. アンケート結果

第14回目の授業にて、学習者に対してPC上で無記名アンケートを実施した（授業実施大学の提供するLMSの機能の中に、無記名アンケート実施・回収機能がある）。本稿で報告する項目は、すべて5件法であり、その結果を次のページの表2に示す。

質問項目1では、2014年度春期semesterで行われた講義型授業がどの程度役に立ったかを尋ねた。今回の学習者の全員が、筆者が春期semesterにおいても担当していた英語の講義型授業を履修していた。ただし、春期の英語の授業は、日本や海外の様々な法を題材に扱った教科書を使って、聞き、読む（黙読と音読）という活動を主としており、プレゼンテーションをさせる授業は行われていなかった。

質問項目2では、本稿の中心であるグループプレゼン型授業がどの程度役に立ったかを尋ねた。これら2項目を比べると、グループプレゼン型授業の方が役立つと感じたようである。

では、グループプレゼン型授業のどこが役立つと感じたのか。それを探るヒントとなるのが、質問項目3から7である。特に、なるべく原稿を見ないで発表をすること（項目3）、聴衆と交流をしながら発表をすること（項目4）、グループ単位で発表をすること（項目5）については、「思う」の評価が7割を超えた。レビューシートに発表者のよい点と改善案を記入すること（項目6）と、チャット機能を使って、発表直後に発表者のよい点を挙げる（項目7）については、それほどの高い評価は得られなかった。

無記名アンケートでは、どの回答がどの学習者なのかを特定できないため、質問項目には、欠席回数を探る項目も入れた。無欠席者は25名（52.1%）であり、1回欠席者、2回欠席者、3回欠席者、4回以上の欠席者はそれぞれ、8名（16.7%）、6名（12.5%）、7名（14.6%）、2名（4.2%）であった。欠席が多いほど、各質問項目での回答にて否定的な回答が増えるかと考えたが、欠席回数と各回答との間には関係は見られなかった。

表2 アンケートの結果 (n = 48)

	思わない	少し思わ ない	どちらとも 言えない	少し思う	思う
1. 講義型の授業は、役立ちましたか	2 (4.2%)	2 (4.2%)	13 (27.1%)	21 (43.8%)	10 (20.8%)
2. プレゼンをしてもらう授業は役立ちましたか	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.1%)	11 (22.9%)	36 (75.0%)
3. なるべく原稿を見ないようお願いしたことは、よかったですか	2 (4.2%)	2 (4.2%)	2 (4.2%)	8 (16.7%)	34 (70.8%)
4. なるべくオーディエンスと交流するようお願いしたことは、よかったですか	0 (0.0%)	1 (2.1%)	1 (2.1%)	10 (20.8%)	36 (75.0%)
5. グループでプレゼンをすることは、よかったですか	1 (2.1%)	1 (2.1%)	3 (6.3%)	7 (14.6%)	36 (75.0%)
6. レビューシートに発表者のよい点と改善案を書くことは、役立ちましたか	0 (0.0%)	1 (2.1%)	2 (4.2%)	17 (35.4%)	28 (58.3%)
7. チャット機能を使って、「発表者のよい点」を述べることは、役立ちましたか	3 (6.3%)	5 (10.4%)	5 (10.4%)	18 (37.5%)	17 (35.4%)

4. おわりに

今回行われたグループによる英語プレゼン授業に対して、学習者は比較的肯定的に捉えていたようであるが、英語で伝える能力がどのような変化したのかについては、今回の調

査には含めていない。今後、第 1 回授業時と第 15 回授業時双方で、英語の口頭発表力、書く力を記録し、比較することで、こうした変化が把握できると思われる。

参考文献

池上彰・Mintzer, R. (2011) 『やさしく読めるお金と経済の話 (All about Money and the Economy)』朝日出版社.

田淵龍二 (2014) 「リーダビリティの原理と速読効果—日本人向けリーダビリティ公式開発—」. 外国語教育メディア学会第 132 回 LET 関東支部研究大会要項. pp.12-13.

田淵龍二・湯舟英一 (2014) 「1 次的読解速度予測に基づく日本人英語学習者向けリーダビリティ公式とその教育的示唆」外国語教育メディア学会 LET 第 54 回(2014 年度)全国研究大会. pp.116-117.